

徳を磨けば必ず応援者が

「子曰く、徳は孤ならず、必ず隣有り。」

【里仁】 【子曰、徳不レ孤、必有レ鄰。】

△孔子言つ、「徳ある人は決して孤立しない、必ず理解し応援する人ができるものだ。」と。▽

東海地方のある小学校の五年生学級で、児童がそれぞれ心に残った本を紹介する時がありました。その時、ある児童は、論語の本を紹介しました。なぜ、論語の本を紹介したのか。それは、この章句「子曰く、徳は孤ならず、必ず隣有り」が、強く心に残ったからだだったそうです。私は、漢学を共に学んでいるその子の家族の人からこの話を聞いたとき、感動しました。その児童がこの章句からどんなイメージをもって読んだのかは分かりませんが、強く生きる糧になっているのだな、と想像できました。学びが生活に活きて働くんだと思えたエピソードでうれしくなりました。

また、ある年の卒業生に贈った式辞を思い出します。

『明治三年九月一六日の深夜、暴風雨に見舞われ舵のきかなくなった大型船が和歌山県串本町樫野崎の海岸に打ち上げられ、それまで見たこともない外国の人が這い上がり助けを求めた、ということがありました。一人また一人と六十九名の人が必死で助けを求めたのです。樫野崎の人は手持ちの着物や布団を持ち寄り、また、蓄えていた芋や飼っていた鶏などの食料も提供し助けました。蓄えの食料がなくなると自分達のみまで喜んで提供し助けたのです。その船はトルコ船籍エルトゥール号でした。私は太平洋に臨む現地に行つて記念館で確かめました。』

時は下つて昭和六十年中近東のある国から、「今から四十時間後に我が国の上空を飛ぶ飛行機は撃ち落とす」ということが世界中に発信されました。その隣国にいた日本人は、その報を聞き、慌てて空港に向かったのですが、どの飛行機にも乗れず啞然とした後、ニックに陥りました。が、その時一機のトルコ航空の飛行機が降り立ち日本人に乗るよう誘われました。日本人二六人全員がタイムリミット前に救われ日本に向かえたのです。なぜ、トルコ航空機が来てくれたのか、その当時政府もマスコミも分からなかったそうです。トルコ大使は、「私たちはエルトゥール号の事故に際して、日本の人から受けた「まごころ」を今も忘れていません。私も小学生の頃歴史で学びました。子供たちも皆知っています。今の日本人が知らないだけです。それで、テヘランで困っている日本人を助けようとトルコ航空機が飛んだのです」と言ったのです。

串本町樫野崎の人々のまごころ、徳が、九五年経つて現地日本人を孤立から救うことになったのです。

君たちに「まごころ」ということを贈ります。』
まさに、「徳は孤ならず、必ず隣有り」です。

論語では、徳は得なりで、仁（愛）、義などを学び自分の身に得て自ら行うことを徳といひます。言葉を多く知っていることではなく自分のものとして行うこと或いは私の如く徳も才も無い者は学ぶことかもしれませぬ。誠を尽くすことかもしれませぬ。樫野崎の人々の徳は、トルコの人たちに広がっていったのだと思ひます。だから、

「人能く道を弘む。道人を弘むるに非ず」

【衛霊公】 【人能弘レ道。非道弘レ人也】

とも論語は説いています。

自分や他の人、万物に誠を尽くす人、即ち徳を身に付けた人は、人としての生き方考え方の道を広めることができる。言葉や理屈だけでは広めることはできないと説いています。誠之館が今なお存続し続けているのは、開校時の正弘公の中庸でいう誠の徳が、今なお生きていますからと思ひてなりません。

「歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後

るを知る」【子罕】【歳寒、然後知「松柏之後「彫也」】

△冬の寒さ厳しい時になって初めて、他の草木は枯れしほむのに、常緑樹の松や栢が、最後までしほまないで残っていることがわかる。このように、厳しい患難辛苦に遭遇した時になって初めて、リーダーの揺るぎない使命感と仁（愛）、義の徳の有り難さがわかる。▽

正弘公は福山誠之館開校時、出席叶わず文武両道を激励する「御諭書」を認め、式で披露されたようです。

私たちが誠之館に通った頃は、戦後のベビーブームで進学、就職競争の激しい頃でした。が、今から考えると正弘公の開校精神宜しく文武両道だったような気がします。

私の三年生の夏、部員わずか十数名の野球部は、甲子園予選の決勝まで勝ち上がり、先取点を取りながら惜敗しましたが、後にカープの中軸となった投手擁する広陵と堂々と戦いました。また、その頃はインターハイに多くの部、多くの人が出場し活躍していました。また、文化部も将棋同好会が、二年連続で将棋連盟認定全国大会へ出場し、初年度は個人戦二位、二年目も勝ち進み優秀な実績を残すなど盛んでした。進学進路も一人一人頑張りました。夏休み炎天下真つ黒になって庭球練習に励んでいた級友は学も成し国の人々に尽くす業に励みました。ある人は、休憩時間になると外へ出てボールを追いかけました。学を成し多くの人の命を救うなど、全国各地各界でそれぞれ活躍しています。まさに文武両道知徳体一体だと気づきます。そして今なおその精神は引き継がれています。これからも、誠之館建学の根本である論語、中庸など漢学も改めて学び、この精神を持ち成長し続けていけたら、と思ひて止みませぬ。

皆様のお導きをよろしくお願いいたします。